

# 日本人英語学習者と英語時制体系習得の困難点について

荻原 洋

(2002年10月21日受理)

## Japanese English-learners and their difficulties in acquiring the English tense system

Hiroshi OGIHARA

E-mail: ogihara@edu.toyama-u.ac.jp

**Key words:** English tense system, Japanese tense system, present perfect, second language acquisition

### 0. はじめに

日本人が英語を学ぶ際特に難しいと感じるものはたくさんあるが、なぜそれらが難しいかについてはきちんと説明がなされていないことが多い。本小論はその中の1つである(現在)完了形を取り上げ、いくつかの観点からその原因の一端を探ることを目的としている。

まず、近年出版された大きな英文法書のいくつかにおける時制の取り扱いを概観することによって、英語時制論のポイントを整理し、それを基に日本語の時制との比較を試みる。さらにその上で、日本の英語教育における時制(特に現在完了形)の扱い方からどのような問題点が見えてくるかを論じることにしたい。

### 1. 時制論

ここで取り上げるのは、Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1983)、Declerck(1991)、Huddleston & Pullum(2002)の3つの英文法書の時制論である。以後、言及を簡単にするためにそれぞれをM&F(1983)、DCK(1991)、H&P(2002)と表記する。M&F(1983)は、その副題“An ESL/EFL Teacher's Course”が示すように、英語を外国語として教える教師用

に書かれたものであり、複雑な言語事象をできるだけ簡単な基本的原則(規則)で説明しようとしており、英文法の全体像を理解するための最初の一步として大変役に立つものである。DCK(1991)は、著者自身が英語の母国語話者でないため、それが幸いして、英語を母国語とする英文法家たちが見過ごしてしまいがちな点にまで思慮が行き届いており、英文法を考える上で参考になる点が多い。特に時制論に関する部分は充実しており、時制の問題が複雑でなおかつ非常に興味深い分野であることを感じさせてくれる。H&P(2002)は、英文法の金字塔の1つであるQuirk, et al. (1985)の後継書と言って良いものであるが、理論面あるいは分析方法等においてそれとはかなり異なるアプローチを採っており、言語資料の信頼性や豊富さと共に、今後の英文法研究の基本的参考文献の1つになるものである。

#### 1.1. 時制の意味と形式

言語は、意味とそれを表す形式の対応の集合体として成り立っている。時制に関して言えば、その意味(あるいは働き)については、(1)に引用するようにほぼ一定の合意が得られている。(以下、DCK(1991)については、断りが無い限りその邦訳

書から引用する。)

- (1) a. The meaning of tenses entails a language-specific way of dealing with time and the relationship of events and interlocutors to time. (M&F, p.61)
- b. 時制 (...省略...) は言語学上の概念であり、状況を時間軸上に位置づけるために動詞のとり形をさす。(DCK, p.77)
- c. The general term *tense* applies to a system where the basic or characteristic meaning of the terms is to locate the situation, or part of it, at some point or period of time. (H&P, p.116)

しかしながら、この「出来事や状況を時間軸の上に位置づける」という基本的な働きについては合意があっても、具体的にその働きの中にどのような下位区分を認めるか、という点になると文法家たちの意見は分かれてくる。そして、その主な理由は、時間軸の設定の仕方にあると考えられる。

ある出来事を時間軸上に位置づける場合、「何年の何月何日の何時何分に」というように、時刻を細かに指定することによってそれを行うことも不可能ではないが、ある基準時を設定した上でそれとの時間的(前後)関係において当該の出来事を時間軸上に位置づける、という方がより一般的であろう。この設定される基準時には2つの種類があり、1つは発話時、もう1つは、それ以外の基準時である。出来事の起こる(起こった)時刻を T E (time of event)、発話時を T S (time of speech)、発話時以外の基準時を T O (time of orientation) と呼ぶことにすると、時制の意味の問題というのは、簡単に言えば、T E を T O や T S との関連でどこに位置づけるかというだけのことになる。しかし、実際には、時制の問題は非常に複雑な様相を呈している。その原因は、先に述べたように、時間軸の設定の仕方にある。つまり、人間は、時間を1つの大きな塊として捉えているのではなく、過去、現在、未来のように、いくつものより小さな塊に区切って認識しているのである。そして、問題は、人間の認知能力の問題

として時をどのように認識し分けることができるかではなく、実際の言語使用の場面において、どのような時の区分が利用されているか、ということである。以下、先の3つの文法書の時制論を基に、具体的に見てみることにする。

#### 1.1.1. M&F(1983)

M&F(1983)は、Bull(1960)が提案しているスペイン語の時制を記述する枠組みを、英語の時制の記述に応用している。この枠組み(以下Bull Framework)の特徴は、まず時を大きく「過去時・現在時・未来時」に分け(以下、大区分と呼ぶ)、さらにそれぞれの時区分の中に「基本前時・基本時・基本後時」という下位区分を設けることにある。これにより、時は概念上(意味上)9つの領域に区分される<sup>1)</sup>。この区分は一見ごく自然なものに見えるため、M&Fは、この区分は万国共通であり、あとは個別言語がそれぞれの意味区分に対してどのような言語形式を用意しているか、という問題である、としている。彼らによると、英語は(2)のような形式を用意しているという。

(2) Bull Frameworkに英語の時制形式を当てはめた表

	[基本前時]	[基本時]	[基本後時]
【過去時】	過去完了形	単純過去形	(単純過去形)
【現在時】	現在完了形	単純現在形	現在未来形
【未来時】	未来完了形	単純未来形	(単純未来形)

単純未来形としてwill/be going to、現在未来形(future of the present)としてbe going toが、それぞれ挙げられている。また、過去時の基本後時と未来時の基本後時は、それ専用の言語形式を持たず、それぞれの時間領域の基本時を表す言語形式を兼用する、としている。(例文についてはM&F(p.67)を参照。)従って、英語の時制体系では、9つの意味を7つの言語形式で表現仕分けしていることになる。

M&Fによれば、この分析の最大のメリットは、談話を構成する各文の時制の選択上の問題を「極めて簡単に」説明できることにある。例えば、(3)の2つの例を比べてみる。(イタリック筆者)

- (3) a. \*I have a splitting headache that I had for two hours; I think I will take a couple of aspirin tablets.  
 b. I have a splitting headache that I've had for 2 hours. I think I am going to take a couple of aspirin tablets.

(3. a)のイタリック体の時制が表す時の大区分を見ると「現在時-過去時-現在時-未来時(現在時)」となっており、これだけ時間軸が移動すると、状況が大変掴みにくいことが分かる。これに対して(3. b)は、全て現在時に統一されており、(3. a)に比べ状況が頭の中に入って来やすい。従って、(4)のような一般的な制約が存在すると考えられる。

- (4) 1つのまとまった談話においては、連続する文の時制が、過去時・現在時・未来時という時の大区分の間を、自由に移動してはならない。

(4)はかなり大雑把な言い方であり、実用的にはもう少しきちんと述べる必要がある。また、「自由に移動してはならない」という表現は、「ある条件が満たされれば移動は可能である」という含みを持っている。(条件については、M&F (pp. 68-69)を参照。)

最初に述べたように、M&F(1983)は英語教師用に書かれたものであり、しかも英文法の基本的な部分をできるだけ簡単な(一般的な)原則で理解させることを主眼としている。日本人英語学習者の書いた英文を母国語話者に添削してもらった時頻繁に訂正されるものの中に、「主語の揺れ(主題の不統一性)」と共に「時制の揺れ」があるという実状(日本のある国立大学で英作文の授業を担当している2人の英語母国語話者に聞いた話によると、主語の揺れも時制の揺れも話があっちこちに飛ぶので読んでいて頭がグラグラする、ということであった)を考えると、時制を教える際には、(2)のように時制の体系を分かりやすく示した上で、「同じ時の大区分の中でなら基本前時・基本時・基本後時の間を行ったり来たりすることは構わないが、時の大区分の間を移動するときは、それが分かるようにきちんと示さなければいけないんだ

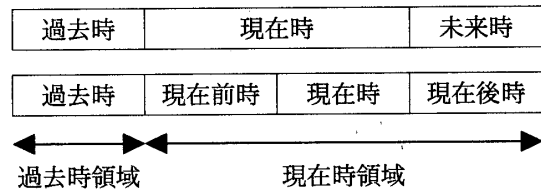
よ」というような説明を加えることが、学者者の理解を大きく助けるように思われる。

しかし、時制体系を理解するための最初の一步としてはこれでも十分であるが、英語の時制体系は実際はこれ以上に複雑な様相を呈している。この一番簡単な原則では説明しきれない現象がたくさんある。

#### 1.1.2. DCK(1991)

DCK(1991)の時制論の特徴は、時の区分の仕方にある。それは、まず時を大きく過去時領域と現在時領域に分ける。過去時領域は「完全に発話時以前」であり、現在時領域は「発話時を含む時間領域」と定義される。このうち、現在時領域はさらに現在前時・現在時・現在後時の3つの時間領域に下位区分される。これを、過去・現在・未来という時間領域の区分と比べてみると、現在前時の扱いが特徴的であることが分かる。

- (4) 時の区分の比較(概略図、下がDCKの区分)



DCKの言う現在後時は未来時とほぼ同じなので、現在・過去・未来と時空間を3分する考え方と比べ、現在前時だけが新たに独立の地位を与えられている。これは、発話時以前に生じた状況を過去のものとして捉える場合と現在のものとして捉える場合があって、それが大きな意味を持つということを示しているとも言える。そして、このように時間領域を区分する根拠はほぼ次の一点に絞られると思われる。すなわち、

- (5) 4つの時間領域のそれぞれにおいて、出来事(状況)を基準時に結びつけるためのその領域独自のシステムが存在する。

出来事(状況)を基準時に結びつけるということは、その出来事の生じた時と基準時の間の時間的

前後関係を示すことであり、具体的には「基準時に先行する(先行性)」「基準時と同時である(同時性)」「基準時に後行する(後行性)」の3種類の指定の仕方がある。つまり、過去時・現在前時・現在時・現在後時のそれぞれの時間領域において、この3種類の時間的前後関係の指定の仕方に、領域独自のやり方が見られる、ということになる。

DCKによれば、特別な場合を除き、全ての発話は、それがどの時間領域に属する状況を述べたものかを、示していなければならない。そしてそれは、「基準時」の中でもただ1つ絶対的基準として指定し得る「発話時」との関連において指定されることができる。このように、他の状況に関係なく、直接的にある状況や場面を発話時に結びつける働きを持つ時制を「絶対時制」と呼んでいる。絶対時制によって示された時点は、それぞれの時間領域における基準時となる。そして、その新たに設けられた基準時との関係において別の状況が時間軸上に位置づけられる。この働きを持つ時制が「相対時制」と呼ばれる。(6)はそれぞれの時間領域における絶対時制と相対時制をまとめたものである。(なお、発話時を基準にして規定された4つの時間領域は「絶対的時間区分」と呼ばれている。それぞれの具体例については、DCKを参照。)

(6) 時間領域毎の絶対時制と相対時制

	[絶対時制]	[相対時制]		
		(先行性)	(同時性)	(後行性)
[過去時]	過去形	過去完了形	過去形	条件時制
[現在前時]	現在完了形	★	★	★
[現在時]	現在形	過去形、 現在完了形	現在形	未来形
[現在後時]	未来形	★	★	★

M&Fでもそうであったが、表中に「未来形」という時制形式が登場している。「英語には現在と過去という2種類の時制しかない」という主張があるが、これは「動詞がその形態(語尾変化)によって区別する時制は2つしかない」という理由による。しかし、時制の働きを考えたとき、その範囲を形態論的区別に基づくものに限らなければならない先験的な理由はない。(DCK, p.78) (なお、完了形の問題については次のH&Pのところでも触れ

る。)

表中に★印がついている箇所は、複雑な体系になっているため、表に入りきらないところである。以下はDCKの説明の要約である。

【現在前時】について言えば、その時間領域を指定する現在完了形が表す状況は大きく分けて2つある。1つは「過去に始まり現在まで継続している場面」であり、もう1つは「過去のある時点から現在までの間に少なくとも一度は生じた場面」である。前者を「継続完了」、後者を「不定完了」と呼ぶ。(現在完了で「結果」の読みと言われているものは「話し手は主として〈今〉を問題にしている」という不定完了の含意に過ぎない。(p.140))そして、どちらの「完了」かによって、相対時制のシステムは違ったものとなる。

不定完了の場合から見ると、通例、不定完了が使われるのは、過去のある場面を、現在と関連するものとして、初めて談話に導入する場合である。つまり、【現在前時】という時間領域を指定するためだけに用いられる。そして、ひとたび時間領域が定められると、その後、導入した場面に新たに情報を付け加えるためには、場面そのものに関心が移るため(これを「時間的視点の転換」と言う)、過去の状況を述べるためのシステムに乗り換える。すなわち、表(6)の【過去時】の[相対時制]のところにあるシステムが用いられる。(7)はその具体例であり、典型的な不定完了の用法を示している。

- (7) a. *Some idiot has put diesel in the tank instead of petrol. Which of you did that? — I did.*  
 b. *I have tried using that kind of detergent, but the result was not satisfactory.*  
 c. *Have you ever considered growing roses there? — Yes, I have. But my wife decided against it.*

一方、継続完了では、それが表す場面が発話時を含むため、その後に述べられる全ての状況が、発話時との関係で示されることが可能になる。発話時との関係で示されると言うことは、絶対時制の働きそのものであるから、結局のところ、継続

完了によって定められた【現在前時】という時間領域の中では、相対時制の特別なシステムは存在せず、4つの絶対時制により、新しい場面が導入されていくことになる。(8)がその例である。

- (8) a. He has always maintained that he *doesn't like* mushrooms.  
 b. The sheriff has known for some time that Big John *has been* in town.  
 c. I have known for some time that it was not Bill who *stole* the money.  
 d. I have known since last week that Jim *has passed* all his exams.  
 e. Ever since this morning he has repeated that he *will complain* to the manager.

つまり、同時的な場面は現在形(a)または現在完了形(継続完了)(b)で、先行する場面は過去形(c)または現在完了形(不定完了)(d)で、後行する場面は未来形(e)で、それぞれ表されるのである。

では【現在後時】についてはどうであろうか。ある状況を【現在後時】領域に属する別の状況に関係づけようとする場合、通常、時間的視点が移動し、【現在後時】領域の基準時があたかも発話時であるかのように振る舞う。ということは、新たにそこから4つの絶対的時間区分が指定され((6)の絶対時制の働き)、さらにそれぞれの時間領域内で状況間の時間的關係が示される((6)の相対時制の働き)ことになる。つまり、【現在後時】領域内で生じる状況が、【現在後時】の基準時(新しい発話時)に先行する場合は【過去時】領域か【現在前時】領域の時制システムで、同時的な場合は【現在時】領域の時制システムで、後行する場合は【現在後時】領域の時制システムで、それぞれが述べられることになるのである。(9)にいくつか例を示す。

- (9) a. The police will believe that he was *killed* tonight.  
 b. Who will look after you when Brad and Sybil *have left*?  
 c. If the weather is fine, father will say

that it *is* time for a picnic.

- d. He will swear that he *will never tell* her the ugly truth.

(9. a)はこれから誰かを殺そうとしているときの発話であり、補文で述べられている状況が未来のある時点(時間的視点の移動の結果出来た新しい発話時)から見ると過去の出来事になるので、過去形が用いられているのである。同様に、(9. b)の補文の内容は未来のある時点から見た【現在前時】に属するものであり、(9. c)の補文の内容は【現在時】、(9. d)の補文の内容は【現在後時】にそれぞれ属するものなのである。

先に述べたように、DCKは時制に関する現象を非常に丁寧にしかも論理的に分析しており、それが時間領域区分において【現在前時】を独立させる論拠になっている。このことは、人間が論理的な思考により時間というものをどのように区分して認識し得るかという問題と、実際の社会生活においてはどのような時間の区分が必要かつ有益であるかという問題とは、別の次元の問題であることを示唆している。確かに、既に生じた状況が、「今」と全く関係のない過去のことなのか、「今」と深く関わりを持つ依然として重要なことなのか、という問題は、人間生活においてかなり重要なことであろう。その意味では、DCKの時間領域の区分はかなり説得力を持つと思われる。

### 1. 1. 3. H&P (2002)

H&P (2002)の時制論の特徴は、時制を一次的(primary)なものと二次的(secondary)なものに分けることにある。一次的なものは、動詞の屈折語尾によって表されるものであり、英語には「現在」と「過去(preterite)」の2種類しかないと言う。これに対して、二次的なものは、助動詞haveを用いた分析的(analytical)なもので、「完了」と「未完了」があると言う。

時制をこのように2種類に分ける主な理由は次の通りである。(H&P. p.159) まず、時制の役割は基準時との関係において出来事時を時間軸上に位置づけることであり、その意味では本来直示的(deictic)なものであるが、動詞の屈折語尾が示

す現在と過去は明らかに直示的であって時制本来の役割に合致していると言えるのに対し、完了形が示す時点は「他の時点との相対的な時間関係」に基づくものであり、直示的とは言い難い。

さらに、一次的時制は、二次的時制に比べてより深く文法の中に組み込まれて (highly grammaticalised) いる。具体的には、まず第1に、一次的時制は屈折という形で動詞にしっかり結びつけられているのに対し、二次的時制は文法形態素の付加という比較的ゆるやかな形式によって作られる。第2に、一次的時制は現在と過去というはっきりした対立を含むが、二次的時制にはそれがない。完了を示す特別な形はあるが、未完了を示すそれはない。第3に、一次的時制は本来の意味以外の意味で使われることがある (例えば、過去形が蓋然性の低さ (modal remoteness) を表すのに用いられたり、時制の一致 (backshift) で用いられしたりすること) のに対し、完了形は、たった1つの用法しか持たない。

以上の理由から、完了形は一次的時制とは別の種類の時制であると見なされ、その働きは、「～より前に」という意味の「過去」を表すものとされている。従って、「過去」を表す時制としては、一次的時制の過去 (preterite) と二次的時制の完了 (perfect) の2種類があることになる。

完了形は、一次的時制と二次的時制が組み合わされた複合時制 (compound tense) であり、現在完了形は現在 (助動詞 have の現在形) と過去 (「have + 過去分詞」によって示される過去) の組み合わせ、過去完了形は過去 (助動詞 have の過去形) と過去 (「have + 過去分詞」によって示される過去) の組み合わせ (いわゆる「二重過去」) ということになる。

未来時制については、これを認めず、未来を表現する方法にはいろいろなものがある、という言い方をしている。そして、助動詞 will が未来時を表す時制形式であるという主張に対しては、助動詞 would は will の過去形であること (従って、will を未来時制として認めてしまうと「未来時制の過去形」という不合理なもの存在を認めることになってしまうこと)、will は文法的にも意味的にも can, may, must のような法助動詞と同じ範疇に属すること、等を理由に反論している。

未来時制については、このような考え方もあるとは思われるが、はっきり時制要素として認めている完了形が、いわゆる未来完了という形で、彼らが時制によるものではないと主張する「未来の表現」の中に存在することに対して、合理的な説明がなされなければならない、という問題が残る。

## 1.2. 英語時制論の整理

以上、3つの時制論の概略を見てきたが、時制論を整理する際のポイントは次の2点にあると考える。1つは、未来時制をどう考えるか、という問題であり、もう1つは、完了形をどう考えるか、という問題である。時制そのものの意味 (機能) についてはほぼ共通の認識があり、時間領域の区分については完了形の問題が深く関わっている。

未来時制を認めるかどうかについては、既にDCKの時制論のところで述べたように、時制形式を屈折形に限らなければならない理由はない。未来時制を認めないH&Pでさえ、屈折形以外の分析的な時制形式を認めている。たとえ未来時制を認めなくても、実際問題として、未来の出来事を表現する文法システムを記述することが可能であり、そういった意味からも、未来時制を認めることに問題はないように思われる。要は、それぞれの時間領域毎に、それ用の時制形式群が用意されているかどうかであり、英語の場合、未来時領域にもそれは用意されていると言える。(H&Pの場合、未来完了形の問題があることは先に述べた。)

完了形については、それが時制形式であるという点では、共通の認識がある。そして、現在完了の意味も基本的には3つの時制論で同じである。つまり、現在完了形は「発話時を基準時とし、それ以前に出来事時を位置づける」役割を持つ。違うのは、その意味の「確保の仕方」であり、H&Pは発話時との関連をhaveの現在形に求め、DCKは独自の時制体系の存在を論拠に (発話時と直接関連づけられる) 絶対時制という形に求める。

従って、3つの時制論については、本質的な相違はないと考えて良いと思われる。ただし、既に述べたように、実際の社会生活において多分重要かつ有益であろうと思われる「今に関わる過去の出来事が存在する時間領域」を別個に設定するDCK

の時制論は、極めて示唆に富むものであると言える。

### 1.3. アスペクトの問題

ここで取り上げた文法書以外の多くの文法書でも、完了形は時制体系に完全に含まれるものとして扱われている(安藤(1983)、McCoard(1978)、三原(1992)、Quirk, et al. (1985)等)。にもかかわらず、日本の英語教育においては、完了形は時制ではなくアスペクト(aspect)として扱われることが多い。そこで、次に進む前に、完了形をアスペクトとして扱おうとする場合の問題点を整理しておくことにしよう。

時制論で取り上げた3つの文法書のアスペクトの定義は、以下の通りである。

- (10) a. (Whereas tense relates to the time when an activity or state occurs,) aspect in a language comments upon some characteristic of the activity or state. (M&F, p. 69)
- b. 相とは、同じ状況に関する異なったとらえ方のことである。(DCK, p. 79)
- c. The term aspect applies to a system where the basic meanings have to do with the internal temporal constituency of the situation. (H&P, p. 117)

これらは、いずれもほとんど同じことを述べている。H&Pによれば、進行相とそうでないものの差は次のようなものである。

- (11) a. NON-PROGRESSIVE She goes to school.  
b. PROGRESSIVE She is going to school.

両者の違いは、話者が状況をどうとらえているかの違いであって、(b)の進行相では、それを内側からとらえ(takes an internal view)、進行中のこととして見ており、(a)の非進行相では、それを外側からとらえ(takes an external view)、状況の内的な側面や特性には特に言及していない(p. 117)。DCKでは、「与えられた状況をまるごと表現

することもあれば、進行中の事柄として……とといったように、様々に異なるとらえ方で表現することができる」(p. 79)と説明されている。

これらの定義や説明から、完了形がアスペクトとは全く別の意味(機能)を有していることは明らかである。にもかかわらず、先に述べたように、日本の英語教育では完了形をアスペクトとして扱わざるをえない理由がある。それについては、次の節で触れることにして、ここでは、完了形をアスペクトと見なすには、かなり多くの問題に答えなければならないということを指摘し、「完了形=アスペクト」論がきちんと破棄されるべきであることを主張しておきたい。

まず、現在完了形には「完了」「継続」「結果」「経験」という別個の意味がある、という主張について。このような意味の種類は、英語の動詞がその固有の意味の一部として持つ語義的アスペクト(「状态的/非状态的」「完結的/非完結的」「瞬時的/非瞬時的」等)とよく似ているため、完了形はアスペクトであるという主張のもっとも大きな拠り所となっている。しかし、これは逆に「完了形は時制に他ならない」ことを示しているとも言える。(12)の例は安藤(1983)からの引用である。

- (12) a. The lake has frozen.  
b. The lake has just frozen.  
c. The lake has frozen for a month.

(a)は「結果(完了)」、(b)は「完了」、(c)は「継続」の意味を持つとされるが、そのような意味はどうやって形成されたかということ、動詞freezeが持つ「完結的、瞬時的」という語義的アスペクトに副詞的修飾語句の意味が加わり、さらにそこに完了形の骨格(have+V-en)の意味が加えられて、出来あがったのである。この完了形の骨格の意味は「ある出来事や状態が過去に生じ、それが基準時(現在完了の場合は発話時)まで広がる時間領域の中に位置付けられる(と話者が判断している)」というものである。従って、(c)のように発話時までを含む時間領域を示す副詞的修飾語句(for a month)がある場合は「継続」の読みとなり、(b)のように発話時を含まない時間領域を示す副詞的修飾語句(just)

がある場合は「完了」の意味となる。

このように、完了形の「意味」と考えられているものは、過去から発話時(基準時)までの広がりを持つ時間領域が指定され、動詞(と副詞的修飾語句)の意味が与えられれば、自動的に導き出されるのである。このような関数的な方法では導き出せない意味がある、という明らかな事例がなければ、「完了形=アスペクト」論は根拠を失うことになる。そして現実的にそのような事例は見当たらない。

次に、これとの関連で、haveを本動詞とみなし完了形の「意味」を分担させる考え方がある。すなわち、一般動詞のhaveの基本的意味は「所有」であるから、完了形の表現では、haveの後に続いて述べられる状況を話し手が基準時現在において保有しているということが示されており、そこから(多分に会話の含意的に)「完了」「継続」「結果」等の意味が導き出される、という考え方である。この考え方では、haveが現在形なら「現在における所有」の意味が出てくるし、haveが過去形なら「過去における所有」という意味になり、基準時(発話時)との関係付けも出来るので好都合であるとされている。しかし、この考え方を採る場合、完了形の疑問文や否定文において本動詞であるはずのhaveが助動詞として働く理由がきちんとした形で与えられなければならない。つまり、英語にはbe動詞のように本動詞でありながら助動詞的に振舞う動詞もあるが、同じ1つの動詞でありながら、完了形以外の場合では疑問文や否定文で助動詞のdoを必要とし、完了形の場合は、肯定文では本動詞として働いているのにもかかわらず、疑問文や否定文では助動詞として振舞うのはなぜか、という疑問に対する明快な答えがあるか、という問題である。そして、これはほとんどありそうにない。

最後に、「完了形=アスペクト」論では、完了形が時指示の機能しか持たない場合をどのように説明するか、という問題がある。これには、過去完了形が「過去の過去(いわゆる大過去)」を表す場合などが当てはまる。この過去完了形は、単純過去と同じ性質のものであり、「継続」「完了」等の意味を持つことはあり得ない。

以上は、完了形をアスペクトと捉える場合に問

題となってくるものであるが、これらに対する原理だった説明はいまだに与えられていない。しかも、完了形を時制と捉えることによって、いわゆる完了形の「意味」はいくつかの因子から自動的に演算されることが可能であることを考えると、あえて完了形をアスペクトとみなす理由はないと言ってよい。

にもかかわらず、日本の英語教育の場で完了形がアスペクト的に教えられているのにはそれなりの事情がある。次の節では、そのことを中心に考察したい。

## 2. 日本人による英語時制学習の問題

この問題を考える前に、日本語の時制システムはどうなっているかについて簡単に見ておく必要がある。というのも、日本の中学校用の英語検定教科書の指導解説編には、(現在完了時制は)「日本語的な発想からはなかなかわかりにくい表現である」とか「現在完了形は日本語との比較によってもなかなか理解しにくい項目である」(New Horizon、1998年、東京書籍)というような説明がよく見られるが、これは現在完了という概念(意味)が(その独自の形式も含め)日本語の体系の中に見出し難いものであるという事実解釈に基づいているからである。また、教育実習生の作成した学習指導案の中に、「特に現在完了形の概念は、日本語には無いものであるので、過去形等と混同してしまう生徒が出てくることが予想されるが、……」と断定されているものを見たことがあるが、これもどこかの教員向け指導書からの受け売りであることは容易に想像される。

しかし、本当に日本語には現在完了という概念は存在しないのであろうか。「ある」と「ない」とでは、指導法が全く変わってくる可能性があり、英語教師は(他者の受け売りではなく)自分なりにきちんと考えてみなければならない。

### 2.1. 日本語の時制システムに対する1つの考え方

先にBull Frameworkに英語の時制形式を当てはめた表を示したが、この枠組みは時の概念的区分



としては論理的で整然としているので、これに日本語の形式を当てはめてみることにする。表中のアルファベットは(4)の例文の記号と対応する。(基本時の例は省略。)

(3) Bull Frameworkに日本語の時制形式を当ては

めた表	[基本前時]	[基本時]	[基本後時]
【過去時】	た (a)	た	た (d)
【現在時】	た (b)	る	る (e)
【未来時】	た (c)	る	る (f)

- (4) a. 全ての準備が終わったので、私たちは出発した。  
 b. 夕立があったので、だいぶ過ごしやすい。  
 c. 明日の朝、雨が降ったら、もう出かけないと思います。  
 d. あの後、ひと騒ぎあったんだ。  
 e. この週末は現地で調査をする予定です。  
 f. このまま大気汚染が進み一定のレベルに達すると、その後の生態系に大きな異変が現われるでしょう。

表(3)は日本語の時制体系を綿密に検討した結果として示されているわけではない。また、[基本前時]を示す時制形式として、「た」以外に「いた」も可能である。「た」は基本的にはDCKが言うところの不定完了として、「いた」は継続完了として使い分けるといふこともあるように思われる。

いずれにせよ、表(3)がある程度の得たものであるとすると、日本語の時制システムはきわめて簡潔な原理に則って形成されていると考えられる。つまり、「た」は基準時の前を、「る」はそれ以外の時を、それぞれ指し示す働きがあると言える。そして、「た」は、2種類の基準時に対し、それぞれそれ以前の時点を指し示すことが出来る。表(3)で1行目(横)が全て「た」になっているのは、発話時(現在)という基準時より前の、すなわち過去時領域を指し示しているものであり、同じく表(3)の1列目(縦)の全てが「た」になっているのは、過去・現在・未来という時間領域の中のそれぞれの基準時より前、すなわち基準前時を指し示しているの

である。そして、この後者の「た」は、英語の完了形と全く同じ働きを持っていることが分かる。

このようにきわめて簡潔な原理が働いているとすると、日本語に(あるいは日本語母国語話者に)完了という時制の概念が無いとか、完了形という形式が無い、という主張は、かなり不自然なものであるように思われる。つまり、英語のように完了時制特有の言語形式が無いからといって、それが、日本語に完了の概念や形式がない、という主張の論拠には成り得ないのである。むしろ、あれほど簡潔なシステムであるとするれば、日本語にも完了形がある、とする主張のほうが説得力がある。そして、英語の完了形を時制形式と考えると、英語と日本語は非常に良く似た時制システムを採用している、とさえ言えるのである。それを、完了形はアスペクトであると考えから、不必要に事態を難しくしているのである。

## 2.2. 完了形の難しさを考える

日本人英語学習者にとって完了形がなぜ難しいのか、その要因を探ろうとした研究に井口(2002)がある。井口(2002)は、原因を示す仮説を2つ立て、被験者にテストを行い、結果を統計的に分析している。

仮説は次の2つである。(表現を変えている。)

(15) 日本人英語学習者にとって完了形が難しいのは、

- a. 複合的な動詞表現の言語形式操作上の困難さに由来する。  
 b. 日本語の影響による混乱に由来する。

ここで、複合的な動詞表現というのは、受動態、進行形、完了形などのように、助動詞と動詞が組み合わさって動詞的表現を形成しているものを指している。また、日本語の影響による混乱とは、日本語において過去と完了の両方が同じ言語形式で表現されることにより、英語を学習する際にそれが障害となることを指している。

被験者は高校を卒業したばかりの専門学校生(医療系)約50名で、テストは次の3種類である。

- (16) a. 完了形の理解度を調べるもの  
 b. 複合的動詞表現の操作能力を調べるもの  
 c. 日本語の影響を調べるもの

(a)は文中の( )内に適切な表現を入れさせる問題で、選択肢の中に現在完了形、単純過去形、単純現在形、進行形などが含まれている。(b)は与えられた動詞を状況に合わせて受動態や進行形に正しく変換できるかどうかという問題、(c)は日本語の「た」を含む表現を、状況に合わせて英語の現在完了形と単純過去形に訳し分けられるかどうか、という問題である。

(a)の正答率は平均で約70%であり、この完了形の理解度と(b)の複合的動詞表現の操作能力との相関の程度、同じく(c)の日本語の影響との相関の程度を計算した結果、5%の有意水準で、(a)と(b)との間には相関は認められず、(a)と(c)の間には相関が認められた、と報告されている。

つまり、受動態や進行形のような複雑な言語形式を操作することが出来る(出来ない)からといって、同じように複雑な言語形式を有する現在完了形を理解できている(できていない)とは言えないのである。それに対して、日本語の「た」の有する「完了/過去」という二重の機能を理解している(いない)被験者は、英語の完了形と過去形の区別(完了形の理解と言っても良いもの)も理解している(いない)と言えるのである。

(c)の問題の中には、「た」形以外に「ている/ていた」形も含まれているが、過去の意味の「た」を正しく英語の過去形に訳すことが出来る確率が相当高い(84%)のに対し、完了の意味の「た」を正しく英語の完了形に訳すことが出来る確率はかなり低くなっている(23%)。また、「ている/ていた」の場合は完了形で答える確率がかなり高くなっている(45~78%)。<sup>2</sup>

このテスト問題が被験者の能力をある程度正しく測っているとすると、日本語の時制システムには完了という時間領域があり、「た」形がそれ用の形式(の1つ)として存在しているにもかかわらず、英語の時制システム(特に完了形)の学習においては、それが正に転移(positively transfer)しないどころか逆に負に転移(negatively transfer)して

いる、という実情が浮かび上がってくる。

ではなぜこのような負の転移が生じてしまうのか、実際の教授過程を見ながら考えてみることにしたい。

### 2.3. 実際にどのように教えられているか

最初に、先に言及した中学校用検定教科書New Horizonに付随する解説編から、完了形の導入の仕方に関する部分を引用してみよう。(ただし、このような解説編は教科書の執筆者本人が書いたものではない場合もあるので、注意が必要である。)

- (17) a. 「ずっと～にいます」「ずっと～しています」と、現在まで続いていることを言う言い方を理解し、表現できるようにする。

【2年解説編】

- b. 現在完了形のうち、なぜ継続用法から入るかについては、(中略)過去形とは違う現在完了の意味をはっきりと表し、従って、学習上、指導上ともに扱いやすいのは、この継続用法だからである。「完了」「経験」の用法は、過去時制でも表せるのではないかとの生徒の疑問が起こりがちであり、事実、口語ではそれらの意味を過去時制で表すことは珍しくない。【2年解説編】

- c. 「～間、ずっと……です(今もそうである)」というのはどんな英語で表すか」を復習させる。【2年指導編】

- (18) a. 「ちょうど～したところです」と言ったり、「もう～しましたか」と尋ねたりする言い方を理解し、表現できるようにする。

【3年解説編】

- b. 「～したことがありますか」と尋ねたり、それに答えたりする言い方を理解し、表現できるようにする。【3年解説編】

- c. (have been toの用法として)【3年解説編】

(1) 完了：～に行ってきたところだ

(2) 経験：今までに～に行ったことがある

## (3) 継続：今まで～にいる

これらは指示(解説)の一部であるが、ポイントは2つある。その第1は、「完了」用法の現在完了形は、出来事や状況が過去に起こっているという点で単純過去形と同じであるため、学習者に混乱を与えかねないので、継続用法を先に導入するというものである。第2は、現在完了形の表す意味を「それ専用の」日本語の表現で示そうとしている、ということである。

しかし、すでに述べたように、現在完了形の意味として「完了」や「継続」を個別に扱うのは、完了形の本質的な意味を見失わせるという危険を伴っている。つまり、「完了」や「継続」は別個の意味ではなく、動詞の意味特性とか時指示表現などから自動的に導き出される(含意的な)ものであり、完了形の本質的な意味は「ある出来事や状態が過去に生じ、それが基準時(現在完了の場合は発話時)まで広がる時間領域の中に位置付けられる(と話者が判断している)」というものである。ところが、「継続」用法から導入すると、あたかもそれは動作や状態の内的性質(すなわちアスペクト)であるかのように学習者には受け取られやすい。

このような「誤解」をさらに助長するのが、特定の日本語表現との一対一の対応を用いた教え方である。英語の「典型的な」過去形が「た」に置き換えられ、完了形が「ている/ていた」に置き換えられるというようなことが繰り返し行われることによって、日本人学習者は母国語話者として本来持っている「た」に対する正しい知識(過去と完了の2つの時制機能)を無理やり歪めさせられ、【「た」=単純過去、「ている/ていた」=(現在)完了】という、部分的にはあるが、誤った対応関係を構築させられてしまう、ということになる。「完了形はアスペクトだ(当然学習者はアスペクトというような概念は意識していないが)」というような意識が生じているところに、典型的な時制形式である「た」との違いを繰り返し強調されることにより、正の転移は妨げられ、負の転移だけが生じてしまうと考えられるのである。

## 2.4. 改善策はあるのか

では、このような負の転移を正の転移に変えることは可能であろうか。これは残念ながら非常に難しいと思われる。その理由は、単純過去形と現在完了形の違いを考えてみればある程度見当がつく。

すでに繰り返し述べてきたことであるが、(現在)完了形を時制ととらえた場合(これが肝心なことであるが)、過去形との違いとは、過去に生じた出来事や状況を発話者が「現在とは切り離された過去のもの」として認識しているか、「現在とつながった時空間の中にあるもの」として認識しているかだけのことである。であれば、(教える側ではなく学習する側の立場になって考えると、)このような過去形と現在完了形の働きの違いに「気づく」ためには、ある過去の出来事や状況が、現在とは一線を描く本当に過去のものとして話される場面や、それが現在の一部として話される場面に繰り返し居合わせ、自らも時空間の認識の違いを「肌で」実感しつつ、それに対応する表現形式の違いを意識する、といった経験が積み重ねられる必要がある。このような経験は、様々な実生活の場面で英語母国語話者と対話を行うことによってしか得られないものであり、現実的には日本の学校教育の中では不可能である。

これは「日本の学校では英語教育は成功し得ない」と言っているのではなく、「ことばの習得というものの中には、実際にそのことばが使われている状況に身を置かないとどうしても習得できない部分がある」ということを言っているのである。英語の完了形が時制としてではなく、アスペクトとして(あるいはアスペクトであるかのように)教えられているのは、学習者を実際に英語が話されている環境に置くことが難しい以上、何らかの別の方法で対応しなければならないが、時空間の認識の違いを簡単な日本語の表現に置き換えることは非常に難しい。しかし、動作や状況の内的性質の違い(アスペクト)ということなら、異なる日本語の表現を対応させることによってそれを学習者に理解させることは比較的容易に行える、という事情によるのである。

## 2.5. 教室では学習できないほかの事項

このような問題は時制に限らない。同じように日本人にとって学習が難しいとされる冠詞も、問題の本質は一緒である。不定冠詞のaと定冠詞のtheの使い分けの基本にあるのは、たった1つのきわめて簡潔な原則である。すなわち、

- (19) その会話が行われている場面において、ある名詞表現によって指し示される対象が唯一特定できる場合はtheを、出来ない場合はaを使う。

というものである。この簡単な原則が必要にして十分なものであるということは、これがいわゆる「総称的」な用法についても完全に当てはまる、ということからも推測される。例えば、(20)のように、総称文には冠詞のaを用いる場合とtheを用いる場合があるが、両者の違いはどのように教えたら良いであろうか。

- (20) a. A dog is a vigilant animal.  
b. The dog is a vigilant animal.

両方とも「一般的に言って、犬という生き物は警戒心が強い生き物だ」という意味であるが、(a)の方は、不特定多数の犬を頭の中に描いて、その中のどの犬を取ってみてもそういうことが言える、という言い方であり、(b)の方は、頭の中にあるのは様々な生き物の一覧表(動物種図鑑)であり、その中から犬を取り出して、それについて「警戒心が強い」ということが言える、という言い方をしているのである。つまり、生き物の種の一覧表の中に犬は1つしかないので、特定できるのである。(もし会話の参加者の中に、犬というものを見たことも聞いたこともない人がいれば、その人の頭の中にある動物種図鑑には犬は載っていないので、the dog(犬というものは....)と言われても当惑するだけになる。)

このようなきわめて簡単な原則であるにもかかわらず、日本人にとって冠詞の習得が難しいのは、「会話が行われる場面に身を置いて学習する」という機会が極めて少ないからである。冠詞を理解するためには、実際の会話の場面において言及されている範囲がどこまでなのか、ということが分かっ

ていなければならない。上の例で言えば、話題となっているリストは犬だけから成るものなのか、それとも生き物の種の一覧表なのかということが分かっていなければならないのである。英語の冠詞に関する専門的な文法書にChristophersen(1939)やHawkins(1978)といった大著があるが、なぜそれらが大著になるかといえば、原則が複雑なのではなく、名詞によって指し示されるものが唯一特定できる(あるいは、できない)場面というもののタイプを(場面を構成する要素といった観点から分類し)列挙しようとする、それこそ数限りなく想定し得ることになるという事情を反映しているからに他ならないのである。現実の場面なしでは習得できないものを、現実の場面なしで説明しようとするものの、必然的な帰結とも言えよう。

### 3. 結語

本小論では、英語の時制システムに対する最近の代表的な見解を比較検討し、合わせて日本語の時制システムについても、部分的な考察を行った。結果として、完了形は時制システムの一部でありアスペクトではないと見なすべきであること、英語と日本語では完了形に関する部分は非常によく似たシステムになっていることを見た。その上で、日本の英語教育において、本来正の転移が生じてもおかしくないところに負の転移が生じてしまっているということを指摘し、その原因が時制である完了形をアスペクト的に扱っていることにある、ということをも主張した。

さらに、ことばの習得においては、どうしても実際にそのことばが用いられている場面に身を置かなければ習得できない部分があり、完了形の習得はまさにそのような例の1つであることを指摘した。その意味で、日本の英語教育で完了形がアスペクト的な扱いを受けているのは、日本の英語教育の環境を考えた場合、一種の苦肉の策ではあるが、それが結果的には完了形の習得をますます難しくしてしまっている可能性は否定できないであろう。

しかしながら、「外国語によるコミュニケーション能力の育成」、あるいは「使える英語」という目

標を掲げる以上、「現実的には不可能である」だけでは済まされない。小さなことでも、できることから始める必要がある。その際、第2言語習得研究からの示唆は非常に有益である。

第2言語習得では、学習者の頭の中でいかにその言語に対する知識が体系化され蓄積されていくかということが、中心的な視点になる。いわゆる「中間言語」が修正され再構築されていくプロセスが大事なのである。これが行われて始めて実用に耐えられる言語知識が身につく。上で述べてきた完了形の問題は、教え難さという障害を回避するために、肝心の中間言語の修正再構築というプロセスを抜き飛ばしてしまっているために生じている問題と捉えることができよう。

授業計画案などには、「学習内容」、「学習活動」、「指導上の留意点」という項目は必ずあるが、第2言語習得という視点から一番肝心である「学習者の頭の中で起こっていること(あるいは、起こることが期待されること)」という項目はほとんど見られない。「指導上の留意点」の右側に、(それぞれの学習活動によって)「学習者の頭の中で起こっていること(起こって欲しいこと!)」という欄を付け加えるだけで、教師の授業計画はそれまでのものと全く違ったものになるはずである。教師が学習者の頭の中で起こっていることに注意を向けようになれば、必然的に生徒に行わせる言語活動の量は大幅に増えて行くであろう。そして、それがひいては現在ある英語教育の問題の少なくともいくつかに対して、なんらかの解決の手がかりを見出すきっかけになると考えられるのである。

## 謝辞

本稿を書くきっかけとなったのは、富山大学教育学研究科在籍中の中橋尚美さんと、同じく教育学部在籍中(当時)の井口亮介君のお二人と行った英語時制論の勉強会である。お二人ともたまたま英語の時制(特に現在完了形)に関心があり、そのお陰で楽しい勉強会が持つことができ、その中で有意義な意見交換ができたことに対して、お二人に心から感謝したい。ただし、当然のことながら、本小論中にある誤りや不備は、筆者一人がその責

任を負うものである。

## 注

1. 実際はこの他に仮定時(hypothetical time)を設定しているが、別の話になるので省略する。
2. 中部地区英語教育学会2002年福井大会における研究発表の中でも、現在完了形の理解に日本語の言い回しがかなり深く関わっているようだ、という認識が報告されている。(松井正「高校英語学習者にみられる現在完了形と現在完了進行形の差異の認識」)

## 参考文献

- 安藤貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』. 大修館.
- Bull, W. 1960. *Time, Tense, and the Verb*. Berkeley and Los Angeles: The University of California Press.
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course*. Newbury House Publishers, Inc.
- Christoffersen, P. 1939. *The Articles*. Copenhagen: Einar Munksgaard.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha. (邦訳『現代英文法総論』(安井稔), 1994. 開拓社.)
- Hawkins, J. A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness*. London: Croom Helm.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 井口亮介. 2002. 『日本人英語学習者による現在完了形の習得に関する一考察』. 特別研究(BA thesis), 富山大学教育学部.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』. ELEC言語叢書, 三省堂.
- McCoard, R. W. 1978. *The English Perfect: Tense-Choice and Pragmatic Inferences*. Amsterdam: North-Holland.

三原健一. 1992. 『時制解釈と統語現象』. くろしお出版.

中右 実. 1981. 「テンス, アスペクトの比較」.  
『日英語比較講座第2巻, 文法』. 大修館.

中右 実. 1984-6. 「意味論の原理」. 『英語青年』.  
Vol. 130, No. 1—Vol. 131, No. 12.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik.  
1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.